



TITLE:

「雲」の作者 - 斎藤素巖という人 -

AUTHOR(S):

古原, 雅夫

CITATION:

古原, 雅夫. 「雲」の作者 - 斎藤素巖という人 -. 静脩 1978, 15(2): 5-5

ISSUE DATE:

1978-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36804>

RIGHT:

発に行われるようになれば、図書館活動も活発になると同時に、特に、地域センター、全国センターの役割をする図書館にあっては、業務の増加、雑誌の調整業務などが加わり、複写要員と図書館協力の専門的知識のある職員の増加をする必要がある。

図書館協力を視点をおいて雑誌の評価、選択、運用を考える場合、基本となるデーターをどうするか、どの範囲で考えるか、議論の多いところである。大学図書館の資料の選択が大学教官によって行われている我が国では、図書館員が資料の評

価、選択を行うことは図書館員の資質や図書館システムから適当でないという考えと、「定量的」データーにもとづく資料の評価、選択は客観性があり、これこそが図書館員が行い得るものであるという考えである。今後、地域的、全国的図書館協力が行われることを予想するならば、「定量的」データーはますます重要になってくるであろうし、図書館員が作成するデーターが活用されるようになるであろう。現場からのデーター作成が非常に望まれるところである。

「雲」の作者 — 斎藤素厳という人 —

「雲」と題して鯉坂先生が書かれた「静脩」1巻2号の巻頭言は、京大正面玄関にかかげられ、また附属図書館の玄関にその原型がある斎藤素厳作の「雲」についてである。私は今、春の日指しに立って、「雲」をながめながら素厳とはどういう人かを知りたいと思って調べてみた。

斎藤素厳は、本名を知雄といい明治22年10月16日東京に生れ、同45年東京美術学校洋画科卒業後しばらくして洋画家だったお父さんが亡くなられたのを期に、大正3年ロンドンに留学し、ロイヤル・アカデミーで彫塑を修め、かつビグラムという彫刻家の助手として学び、37才の大正5年1月に諏訪丸で帰ってきた。この間に画家から彫刻家への転身が行なわれている。英国から帰った素厳は極度に生活が苦しく、古い工場の一隅をアトリエとして、コンクリートの床の上に友人から借りたフンを敷いて寝起きしたため、腰の病に冒されながら等身7人の群像「行人」などの制作に励み（アトリエ 7巻6号「斎藤素厳論」）、大正6年の第11回文展に「秋」を出品して入選した時始めて素厳を名乗った。素厳の号については「中学校の時分に、同人雑誌をやっていた仲間」「空厳」という号の男がいた。そこでその「空厳」をそのまま拝借して見たが、人の名前そのままでは工合が悪い。仕方なしにそこを見廻すと「素」の字が目についたので、「空」をやめて

「素」に換えて出品して了った。あとで、いやな名前を書いたもんだと悲観していると、今度は落選しなかったのも、それから一生「素厳」とりつかれて了ったわけだ」と「苦楽10年の回想」（中央美術 12巻3号）で述べられている。

大正7年四谷の全長寺にあった友人のアトリエで「敗残」が生れて第12回文展の特選となり、大正9年結婚、大正12年春には先に帝展に出品された「朝暾」（大正8年第1回帝展無鑑査出品）が売れたことによって、念願のアトリエが池袋に建てられた。かくして、治安維持法が公布された1年前の大正13年に「雲」が制作され、軍閥の目にふれた男女の裸体の浮き彫りは、芸術的な評価が与えられることなく圧力が加えられることによって、その行方が問われることになったことは鯉坂先生の巻頭言に詳しい。なお、大正15年9月には日名子実三と彫塑団体である講造社を創立し、昭和2年から展覧会を開いて自らも出品し、その主なものを挙げると「相」（第1回）、「タイス」（第4回）、「母子像」（第6回）、「楠木正成像」（第9回）、「豊穰」（第12回）などがある。作風は浮き彫りが主でロマン的題材が多く、典雅な美しさを示している。

日本芸術院会員であり、日展の顧問でもあったが昭和49年2月2日、84歳で永眠された。

（附属図書館 古原 雅夫）